

家族構造が子どもの自己決定に与える影響に関する研究

若島孔文¹⁾ 花田里欧子²⁾ 駒場優子³⁾ 齋藤暢一郎⁴⁾

末崎裕康⁵⁾ 狐塚貴博¹⁾ 小林 智⁶⁾ 宇佐美貴章¹⁾

¹⁾ 東北大学大学院 ²⁾ 京都教育大学 ³⁾ 府中刑務所教育部 ⁴⁾ 首都大学東京大学院

⁵⁾ 総合研究大学院大学 ⁶⁾ 東北大学大学院研究生

<要 旨>

本研究の目的は大学生を対象に、子どもの頃の家族関係と子どもの頃の自己決定行動が現在の自律性・コンピテンス・関係性といった基本的心理的要求に与える影響について日本・韓国・中国で比較検討し、さらに家族の結びつきと自己決定行動の関係が自律性・コンピテンス・関係性に影響する可能性について検討していくことであった。日本・韓国・中国の大学生の男女計 631 名を対象に、家族関係に関する尺度（小学校低学年・小学校高学年・中学校・高校・現在の 5 時期）、自己決定行動に関する尺度（小学校低学年・小学校高学年・中学校・高校の 4 時期）、基本的心理的要求に関する尺度（現在の 1 時期）に関して質問紙により調査した。

分析の結果、①日本は韓国・中国よりも家族の結びつきが低いこと、②中国は日本・韓国よりも自己決定が全体的に低いこと、③韓国は日本・中国よりも基本的心理的要求が高いこと、といった国によって特徴が大きく異なることが明らかにされた。

<キーワード> 日本・韓国・中国の国際比較 家族関係 自己決定行動 基本的心理的要求

【はじめに】

自己決定とは他者から言われたからではなく自ら選択して決定することである。Deci & Ryan (1985; 2000) は自己決定理論において自律性 (autonomy)、有能感 (competence)、関係性 (relatedness) という 3 つの基本的心理的要求が満たされることで自己決定に繋がっていくことを述べている。日本では子どもが日常生活の中でどれだけ自己決定を行っているかという自己決定行動を扱った研究はいくつか行われているが (例えば、Kamiya, et al., 2010)、Deci & Ryan (1985; 2000) における 3 つの欲求との関連については述べられていない。さらに、子どもが自己決定できるかに大きな影響を与えるだろう家族との関係についても検討されてこなかった。そこで本研究では大学生を対象として、小学生から現在までに至る家族関係や自己決定行動が自律性、有能感、関係性とどのような関連を持っているのかについて、日本・韓国・中国の国間比較を交え

ながら検討することを目的とする。

【方法】

質問紙調査を実施した。対象者は日本・韓国・中国の大学生の男女である。欠損等を除外した結果、日本人の男性 73 名 (平均 21.82 歳)、女性 96 名 (平均 21.62 歳)、韓国人の男性 102 名 (平均 22.84 歳)、女性 123 名 (平均 20.88 歳)、中国人の男性 76 名 (平均 21.34 歳)、女性 161 名 (平均 20.47 歳) の計 631 名 (平均 21.37 歳) のデータを分析に使用した。質問紙の構成は、①フェイスシート、②若島ら (2010) の FRHG (Family Relation History Graph) による父母、父子、母子の 3 者間の「結びつき」因子、③Kamiya, et al. (2010) の自己決定行動尺度 (時間管理、稀有な事態、進路選択、遊びの 4 因子を測定) の短縮版、④田中ら (2003) の基本的心理的要求尺度 (自律性・有能感・関係性の 3 因子を測定) であった。自己決定行動尺度は小学校低学年、小学校高学年、

中学校、高校の4時期について聞き、FRHGはさらに現在についても聞いた。基本的心理的要求尺度は現在についてのみ測定した。また、過去の家族関係や自己決定行動についてどの程度想起できたかについて4件法による測定を行い、想起の得点が低いデータについては分析から除外した。

【結果】

・各因子について

まず小学校低学年、小学校高学年、中学校、高校のそれぞれの時期における自己決定行動尺度と現在の時期における基本的心理的要求尺度に対して主因子法・Promax回転による因子分析および各因子の α 係数を算出した(Table.1~5)。その結果、まず自己決定行動尺度では小学校低学年と小学校高学年において4因子、中学校において3因子、高校において2因子が抽出された。まず1つ目の因子は「テレビ・DVD・インターネット等をどのくらいの時間見るか」、「コンピューターゲーム・インターネットゲーム・携帯型ゲーム等をどのくらいの時間するか」、「夜、何時に寝るか」という3項目から構成されており、先行研究から「時間管理」因子と名付けた。これは小学校低学年($\alpha=.77$)、小学校高学年($\alpha=.75$)、中学校($\alpha=.68$)、高校($\alpha=.59$)の全ての時期において抽出された。2つ目の因子は「どんなことをして遊ぶのか」、「だれと遊んだり仲良くしたりするのか」、「どのような場所で遊ぶのか」という3項目から構成されており、先行研究から「遊び」因子と名付けた。こちらも小学校低学年($\alpha=.70$)、小学校高学年($\alpha=.68$)、中学校($\alpha=.60$)、高校($\alpha=.59$)の全ての時期において抽出された。3つ目の因子は「将来、大学に行くか行かないか」、「将来、どのような高校に行くか」、「将来、どのような職業につくか」という3項目から構成されており、先行研究から「進路選択」因子と名付けた。こちらは小学校低学年($\alpha=.60$)、小学校高学年($\alpha=.70$)、中学校($\alpha=.64$)の3時期において抽出された。4つ目の因子は「ケガや体調を崩したときに病院に行くか行かないか」、「ケガや

体調を崩したときに学校を休むか休まないか」、「どのくらいおこづかいをもらうか」という3項目から構成されており、先行研究から「稀有な事態」因子と名付けた。こちらは小学校低学年($\alpha=.60$)、小学校高学年($\alpha=.55$)の2つの時期において抽出された。抽出された因子数に関しては各時期において違いがあるものの、因子の内容については尺度の参考としたKamiya, et al. (2010)と同じ結果になったと言えるだろう。累積率はそれぞれ小学校低学年は45.75%、小学校高学年は43.79%、中学校は39.68%、高校は35.68%であった。

次に基本的心理的要求尺度に関して因子分析を行った結果、3因子が抽出された。第1因子は「私はたいていのことがうまくできると思う」「私は普段、自分が試みることにに対して有能であると感じる」「普段何かをしようとするとき、私にはその能力があると思う」という3項目から構成されており、先行研究から「有能感」因子($\alpha=.82$)と名付けた。第2因子は「私と私がよく一緒に時間を過ごす人との間には、深い結びつきがあると思う」、「私は普段、自分が時間を一緒に過ごす人と関係し、結びついていると感じる」、「私は普段、人と関わる中で自分に近く、密接な人がいると感じる」という3項目から構成されており、先行研究から「関係性」因子($\alpha=.76$)と名付けた。第3因子は「私は自分が何かをしているとき、自分の考えで行動を選択することができる」、「私は自分で選択し、決定して行動を起こすことができる」、「普段、私は自分が取り組むことに対して、自分で自由に選択ができると感じる」という3項目から構成されており、先行研究から「自律性」因子($\alpha=.74$)と名付けた。これらの結果は田中ら(2003)と同様の結果であると言える。基本的心理的要求尺度の累積率は55.98%であった。

以後の分析では各因子の平均得点を用い、FRHGについても父母、父子、母子の3者間の結びつきの平均得点を用いた。

Table.1 小学生低学年における自己決定行動尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

	I	II	III	IV	h^2
I. 「遊び」因子 ($\alpha = .70$)					
どんなことをして遊ぶのか	.70	-.01	-.02	.01	.48
だれと遊んだり仲良くしたりするのか	.66	-.02	-.03	.01	.42
どのような場所で遊ぶのか	.59	.09	.06	-.01	.45
II. 「時間管理」因子 ($\alpha = .77$)					
テレビ・DVD・インターネット等をどのくらいの時間見るか	-.01	.92	-.10	-.01	.73
コンピューターゲーム・インターネットゲーム・携帯型ゲーム等をどのくらいの時間するか	.08	.63	.02	.03	.49
夜、何時に寝るか	-.05	.55	.19	.03	.45
III. 「稀有な事態」因子 ($\alpha = .60$)					
ケガや体調を崩したときに病院に行くか行かないか	.02	-.08	.69	.03	.45
ケガや体調を崩したときに学校を休むか休まないか	.10	.08	.58	-.10	.39
どのくらいおこづかいをもらうか	-.13	.01	.46	.11	.23
IV. 「進路選択」因子 ($\alpha = .60$)					
将来、大学に行くか行かないか	-.10	.03	.05	.76	.56
将来、どのような高校に行くか	.13	.02	.04	.53	.43
将来、どのような職業につくか	.28	-.05	-.06	.49	.41
因子間相関					
			I	II	III
		II	.55		
		III	.41	.57	
		IV	.63	.49	.55

Table.2 小学生高学年における自己決定行動尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

	I	II	III	IV	h^2
I. 「時間管理」因子($\alpha = .75$)					
テレビ・DVD・インターネット等をどのくらいの時間見るか	.90	-.06	.00	-.10	.67
コンピューターゲーム・インターネットゲーム・携帯型ゲーム等をどのくらいの時間するか	.63	.11	-.04	.05	.48
夜、何時に寝るか	.55	.01	.03	.15	.45
II. 「遊び」因子($\alpha = .68$)					
どんなことをして遊ぶのか	-.04	.82	-.11	.03	.57
だれと遊んだり仲良くしたりするのか	.01	.53	.14	-.08	.36
どのような場所で遊ぶのか	.09	.53	.10	-.03	.40
III. 「進路選択」因子($\alpha = .70$)					
将来、どのような高校に行くか	.05	.01	.65	-.03	.44
将来、大学に行くか行かないか	-.02	-.07	.64	.15	.49
将来、どのような職業につくか	-.06	.20	.55	.00	.43
IV. 「稀有な事態」因子($\alpha = .55$)					
ケガや体調を崩したときに病院に行くか行かないか	-.04	.06	-.04	.70	.46
ケガや体調を崩したときに学校を休むか休まないか	.12	.02	.02	.45	.30
どのくらいおこづかいをもらうか	-.01	-.12	.10	.42	.20
因子間相関					
		I	II	III	
	II	.51			
	III	.50	.57		
	IV	.52	.38	.62	

Table.3 中学生における自己決定行動尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

	I	II	III	h^2
I. 「時間管理」因子($\alpha = .68$)				
テレビ・DVD・インターネット等をどのくらいの時間見るか	.87	-.09	-.07	.65
コンピューターゲーム・インターネットゲーム・携帯型ゲーム等をどのくらいの時間するか	.58	.04	.09	.41
夜、何時に寝るか	.40	.18	.08	.31
II. 「進路選択」因子($\alpha = .64$)				
将来、どのような高校に行くか	.00	.64	-.05	.38
将来、大学に行くか行かないか	.03	.64	-.03	.40
将来、どのような職業につくか	-.04	.56	.09	.36
III. 「遊び」因子($\alpha = .60$)				
どんなことをして遊ぶのか	-.02	-.07	.69	.41
どのような場所で遊ぶのか	.00	.04	.57	.36
だれと遊んだり仲良くしたりするのか	.06	.04	.49	.29
因子間相関				
		I	II	
		II	.46	
		III	.50	.58

Table.4 高校生における自己決定行動尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

	I	II	h^2
I. 「遊び」因子($\alpha = .59$)			
どんなことをして遊ぶのか	.73	-.05	.51
どのような場所で遊ぶのか	.53	.05	.31
だれと遊んだり仲良くしたりするのか	.49	.06	.27
II. 「時間管理」因子($\alpha = .59$)			
テレビ・DVD・インターネット等をどのくらいの時間見るか	-.05	.75	.53
コンピューターゲーム・インターネットゲーム・携帯型ゲーム等をどのくらいの時間するか	.03	.56	.32
夜、何時に寝るか	.12	.39	.20
因子間相関			
		I	
		II	.41

Table.5 基本的心理的要求尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

	I	II	III	h^2
I. 「有能感」因子 ($\alpha = .82$)				
私はたいいていのがうまくできると思う	.95	.01	-.15	.76
私は普段、自分が試みることにに対して有能であると感じる	.66	-.09	.21	.59
普段何かをしようとするとき、私にはその能力があると思う	.66	.07	.08	.55
II. 「関係性」因子 ($\alpha = .76$)				
私と私がよく一緒に時間を過ごす人との間には、深い結びつきがあると思う	-.06	.81	-.03	.60
私は普段、自分が時間を一緒に過ごす人と関係し、結びついていると感じる	.03	.79	.00	.65
私は普段、人と関わる中で自分に近く、密接な人がいると感じる	.07	.49	.13	.36
III. 「自律性」因子 ($\alpha = .74$)				
私は自分が何かをしているとき、自分の考えで行動を選択することができる	-.05	-.01	.85	.66
私は自分で選択し、決定して行動を起こすことができる	.04	.00	.70	.52
普段、私は自分が取り組むことにに対して、自分で自由に選択ができると感じる	.05	.08	.51	.35
因子間相関				
		I	II	
	II	.38		
	III	.60	.48	

・ 国間の比較について

次に日本・韓国・中国の違いを検討するために、データが正規分布していなかったFRHG・自己決定行動尺度の因子においては Kruskal-Wallis 検定、正規分布していた基本的心理的要求尺度の因子においては一元配置分散分析を行った後、それ

ぞれの多重比較を行った (Table.6 & 7)。その結果、小学校低学年および小学校高学年の「家族結びつき」を除いた全ての因子において 1%水準以下の有意差が示された。量が膨大となるため結果の詳細な記述については省略する。

Table.6 国を独立変数、家族関係および自己決定行動を従属変数としたKruskal-Wallis検定および多重比較結果

	日本		韓国		中国		χ^2 値	多重比較	
	平均ランク	N	平均ランク	N	平均ランク	N			
家族結びつき	小学低学年	269.46	148	303.39	199	278.87	222	4.15 n.s.	
	小学高学年	291.12	164	323.67	218	315.65	241	3.24 n.s.	
	中学校	249.33	142	276.84	203	308.08	218	11.57 **	韓 = 中 > 日
	高校	259.77	167	304.63	223	368.77	244	36.92 ***	中 > 韓 > 日
	現在	227.09	170	352.71	225	354.57	244	58.95 ***	韓 = 中 > 日
小学低学年 自己決定行動	時間管理	289.00	148	336.84	199	235.86	222	41.27 ***	韓 > 日 > 中
	遊び	302.68	148	312.78	199	248.31	222	19.15 ***	日 = 韓 > 中
	進路選択	292.97	148	317.96	199	250.14	222	18.60 ***	日 = 韓 > 中
	稀有な事態	245.47	148	332.91	199	268.41	222	30.37 ***	韓 > 日 = 中
小学高学年 自己決定行動	時間管理	343.71	164	368.16	218	239.62	241	66.13 ***	日 = 韓 > 中
	遊び	339.38	164	339.29	218	268.68	241	24.02 ***	日 = 韓 > 中
	進路選択	318.38	164	349.10	218	274.10	241	20.42 ***	日 = 韓 > 中
	稀有な事態	277.16	164	360.82	218	291.55	241	26.28 ***	韓 > 日 = 中
中学校 自己決定行動	時間管理	337.94	142	305.65	203	223.54	218	51.34 ***	日 = 韓 > 中
	遊び	305.02	142	308.72	203	242.12	218	25.98 ***	日 = 韓 > 中
	進路選択	311.09	142	295.43	203	250.54	218	14.55 **	日 = 韓 > 中
高校 自己決定行動	時間管理	381.59	167	319.01	223	272.25	244	46.28 ***	日 > 韓 > 中
	遊び	336.08	167	331.71	223	291.80	244	13.20 **	日 = 韓 > 中

p<.01, *p<.001

Table.7 国を独立変数、基本的心理的要求を従属変数とした一元配置分散分析および多重比較結果

	日本(n=169)	韓国(n=225)	中国(n=244)	F値	多重比較
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)		
自律性	4.61 (0.88)	5.02 (0.79)	4.56 (0.78)	21.60 ***	韓 > 日 = 中
有能感	3.51 (1.09)	4.34 (0.85)	4.26 (0.82)	47.16 ***	韓 = 中 > 日
関係性	4.53 (1.01)	4.94 (0.73)	4.47 (0.83)	20.58 ***	韓 > 日 = 中

***p<.001

・家族関係および自己決定行動と基本的心理的要求の関連について

最後に FRHG の結びつきの高群・低群、自己決定行動尺度の高群・低群を独立変数、基本的心理的要求尺度を従属変数とした二要因分散分析を日本・韓国・中国のそれぞれにおいて小学校低

学年、小学校高学年、中学校、高校の4時期別に行った後、主効果及び単純主効果の分析を行った (Table.8~10)。こちらについても結果の詳細な記述については省略する。

Table.8 日本における家族結びつき(高低)×自己決定行動(高低)を独立変数、基本的心理的要求を従属変数とした二元配置分散分析および主効果の比較結果

自己決定行動	家族結びつき		主効果		交互作用			
	高群	低群	高群	低群				
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	F値(主効果の比較)	F値(主効果の比較)	F値(単純主効果の比較)	
小学校低学年	有能感	3.68 (1.04)	3.60 (1.12)	3.63 (0.96)	3.30 (1.15)	0.95	1.31	0.51
	関係性	4.88 (0.78)	4.70 (0.85)	4.45 (0.99)	4.15 (1.11)	10.10**	2.40	0.16
	自律性	4.67 (0.85)	4.57 (0.98)	4.74 (0.84)	4.60 (0.87)	0.12	0.69	0.03
小学校高学年	有能感	3.61 (0.98)	3.58 (0.99)	3.45 (1.16)	3.44 (1.13)	0.78	0.02	0.00
	関係性	4.90 (0.76)	4.74 (0.74)	4.54 (1.03)	4.14 (1.09)	11.03**	3.82†	0.67
	自律性	4.61 (0.83)	4.60 (0.85)	4.74 (0.88)	4.48 (0.97)	0.00	0.96	0.91
中学校	有能感	3.57 (0.93)	3.53 (1.06)	3.54 (1.10)	3.54 (1.31)	0.00	0.01	0.01
	関係性	4.95 (0.67)	4.70 (0.84)	4.51 (1.01)	4.38 (1.00)	6.37*	1.60	0.16
	自律性	4.72 (0.84)	4.34 (0.85)	4.86 (0.84)	4.51 (0.99)	1.11	5.97* 高 > 低	0.01
高校	有能感	3.46 (1.06)	3.67 (0.99)	3.54 (1.02)	3.62 (1.35)	0.01	0.56	0.12
	関係性	4.95 (0.74)	4.42 (0.93)	4.54 (0.91)	4.02 (1.23)	6.48* 高 > 低	11.22** 高 > 低	0.00
	自律性	4.71 (0.86)	4.43 (0.82)	4.77 (0.85)	4.31 (1.01)	0.05	6.19* 高 > 低	0.36

†p<.10, *p<.05, **p<.01

Table.9 韓国における家族結びつき(高低)×自己決定行動(高低)を独立変数、基本的心理的要求を従属変数とした二元配置分散分析および主効果の比較結果

自己決定行動	家族結びつき		主効果		交互作用			
	高群	低群	高群	低群				
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	F値(主効果の比較)	F値(主効果の比較)	F値(単純主効果の比較)	
小学校低学年	有能感	4.44 (0.81)	4.37 (0.86)	4.41 (0.72)	4.21 (0.79)	0.72	1.49	0.32
	関係性	5.11 (0.74)	5.09 (0.63)	4.98 (0.63)	4.71 (0.82)	6.63*	2.05	1.42
	自律性	5.22 (0.78)	5.03 (0.75)	5.19 (0.69)	4.97 (0.69)	0.18	4.13* 高 > 低	0.02
小学校高学年	有能感	4.38 (0.77)	4.33 (0.90)	4.47 (0.95)	4.23 (0.79)	0.00	1.42	0.67
	関係性	5.20 (0.62)	4.95 (0.64)	4.93 (0.80)	4.71 (0.72)	7.27**	5.88* 高 > 低	0.03
	自律性	5.17 (0.70)	5.01 (0.81)	5.23 (0.82)	4.75 (0.79)	0.88	9.11** 高 > 低	2.11
中学校	有能感	4.36 (0.77)	4.24 (0.84)	4.58 (0.87)	4.28 (0.91)	1.20	3.01†	0.56
	関係性	5.07 (0.69)	4.90 (0.82)	5.09 (0.78)	4.80 (0.61)	0.14	5.08* 高 > 低	0.38
	自律性	5.22 (0.64)	4.93 (0.68)	5.35 (0.72)	4.81 (0.91)	0.00	15.36*** 高 > 低	1.43
高校	有能感	4.32 (0.68)	4.26 (0.86)	4.57 (0.82)	4.22 (0.99)	0.84	2.98†	1.59
	関係性	5.09 (0.62)	4.85 (0.75)	5.11 (0.74)	4.68 (0.71)	0.64	12.24** 高 > 低	1.05
	自律性	5.19 (0.73)	5.03 (0.72)	5.21 (0.63)	4.65 (0.97)	2.77†	11.90** 高 > 低	3.67†

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table.10 中国における家族結びつき(高低)×自己決定行動(高低)を独立変数、基本的心理的要求を従属変数とした二元配置分散分析および主効果の比較結果

自己決定行動	家族結びつき		主効果		交互作用			
	高群	低群	高群	低群				
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	F値(主効果の比較)	F値(主効果の比較)	F値(単純主効果の比較)	
小学校低学年	有能感	4.13 (0.98)	4.33 (0.73)	4.39 (0.61)	4.14 (0.85)	0.08	0.07	4.28* n.s.
	関係性	4.50 (0.92)	4.57 (0.79)	4.56 (0.78)	4.35 (0.79)	0.47	0.40	1.62
	自律性	4.59 (0.88)	4.52 (0.71)	4.68 (0.65)	4.48 (0.84)	0.06	1.79	0.47
小学校高学年	有能感	4.33 (0.92)	4.31 (0.85)	4.29 (0.76)	4.14 (0.75)	0.97	0.69	0.34
	関係性	4.56 (0.80)	4.45 (0.79)	4.48 (0.91)	4.39 (0.84)	0.38	0.72	0.01
	自律性	4.67 (0.78)	4.52 (0.86)	4.66 (0.77)	4.46 (0.73)	0.15	3.07†	0.07
中学校	有能感	4.48 (0.72)	4.06 (0.89)	4.34 (0.74)	4.03 (0.73)	0.64	11.69** 高 > 低	0.28
	関係性	4.68 (0.69)	4.39 (0.98)	4.43 (0.79)	4.46 (0.78)	0.69	1.25	2.00
	自律性	4.81 (0.64)	4.38 (0.93)	4.73 (0.71)	4.32 (0.73)	0.52	15.92*** 高 > 低	0.02
高校	有能感	4.53 (0.76)	4.23 (0.78)	4.28 (0.80)	4.01 (0.83)	5.06* 高 > 低	7.32** 高 > 低	0.04
	関係性	4.60 (0.77)	4.51 (0.85)	4.64 (0.70)	4.20 (0.85)	1.65	6.64* 高 > 低	2.80†
	自律性	4.88 (0.68)	4.49 (0.75)	4.70 (0.78)	4.19 (0.71)	6.38* 高 > 低	22.47*** 高 > 低	0.43

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

【考察】

分析の結果、国間の比較は①中学校以降において日本は韓国・中国よりも家族の結びつきが低いこと、②中国は日本・韓国よりも自己決定行動が全体的に低いこと、③韓国は日本・中国よりも基本的心理的要求が高いこと、が示された。また、日本と韓国の自己決定行動の比較に関しては13変数の内で4変数にのみ差が見られ、残りの9変数については日本と韓国の間には差が認められなかった。これらの結果は Choi & Arai (2003) や加藤ら (2010) とは異なる結果を示したと言える。Choi & Arai (2003) や加藤ら (2010) では実際の中高生を対象としていたのに対し、本研究では大学生に過去のことを想起してもらうことで測定した。このような測定方法の違いが異なる結果を示した要因の一つなのではないだろうか。

次に国別の結びつきと自己決定行動との関連について述べると、まず日本の特徴として、全ての時期において家族の結びつきが「関係性」因子と関連していることや、小学校低学年・高学年では自己決定行動と基本的心理的要求の関連は見られないが、中学校以降になるといくつかの関連が見られることが挙げられる。次に韓国の特徴として、小学校低学年・高学年では家族の結びつきと「関係性」因子に関連が見られるものの、中学校以降では関連が見られなかった。自己決定行動に関しては、小学校低学年において「自律性」因子と関連し、小学校高学年以降においては「関係性」因子と「自律性」因子の両方に関連があることが示された。最後に中国の特徴として、小学校低学年や小学校高学年の時期では家族の結びつきや自己決定行動と基本的心理的要求との関連や見られないが、中学校や高校の時期ではそれぞれに関連が見られることが示された。その際、家族の結びつきや自己決定行動が「有能感」因子との関連を示していた。以上から、家族の結びつき、自己決定行動と基本的心理的要求の関連について国間での特徴を比較する次のようなことが窺える。①家族の結びつきに関して、日本は全ての

時期に基本的心理的要求との関連が見られるが、韓国は小学校低学年、小学校高学年の時期にのみ関連しており、中国は高校の時期にのみ関連している。②自己決定行動に関して、韓国は全ての時期に基本的心理的要求との関連が見られるが、日本と中国は中学校と高校の時期にのみ関連している。③家族結びつきや自己決定行動が「有能感」因子と関連していたのは中国のみであった。

このように、本研究では家族の結びつきや自己決定行動、基本的心理的要求に関して、国によって大きく異なることを明らかにしたと言えるだろう。同じ東アジアに位置する国でありながら、ここまで異なる特徴を示した理由について本研究で詳しく述べることはできない。それぞれの国における家族関係や自己決定に対する捉え方、家庭・学校における教育スタイルの違いといった社会・文化的な要因についても検討していくことが必要であると考えられ、今後の課題の一つであると言えるだろう。

【引用文献】

- Choi, K & Arai, K 2003 Comparative study on child self-determination in Korea and Japan. *The Korean Journal of Developmental Psychology*, 16(3), 135-154.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. 1985 *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior* Plenum; N.Y.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. 2000 The 'what' and 'why' of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.
- Kamiya, T., Kato, M., Wakashima, K. et al. 2010 A Comparative Study of Attitude of Self-Determination for Children in Japan and Korea. (The 2nd Regional Symposium of CIFA (Consortium of Institutes of Family in the Asian Region))
- 加藤道代・田中真理・神谷哲司・若島孔文・狐塚貴博・野口修司・小林 智・平泉 拓・栗田裕

生 2010 東北大学大学院教育学研究科子ども
学研究プロジェクト 平成21年度教育学研究科
長裁量経費企画研究 子どもの生活における自
己決定の実態調査 ―日本と韓国の比較を通し
て― 報告書 (全 94 頁)

田中希穂・田中あゆみ・石川隆行・上田博之 2003
外部委託による職業教育が女子短期大学生の就
職活動動機に及ぼす影響 大阪信愛女学院短期
大学紀要, 37, pp.43-50.

若島孔文・狐塚貴博・板倉憲政・宇佐美貴章 2010
「ICHIGEKI」を用いた同時的・累積的家族関
係に関する研究 Interactional Mind III
(2010) , 92-98.